

1980年の世界の異常天候

誌名	水利科学
ISSN	00394858
著者名	田代,茂夫
発行元	水利科学研究所
巻/号	25巻2号
巻号補足	
掲載ページ	p. 15-31
発行年月	1981年6月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



1980年の世界の異常天候

田代茂夫

1. 世界の異常天候

1980年の世界の天候は、ヨーロッパの寒春、アメリカ中西部の干ばつ、日本から中国大陸にかけての冷夏など、しばしば異常天候が現われた。

ここでは、異常高温、異常低温、異常多雨、異常少雨の定義を次のように定め、おもに月平均の状態について解説する。

(1) 異常高(低)温

月平均気温偏差が、月平均気温標準偏差値の2倍以上となった所であり、統計的には約25年に1回の出現率にあたる。

気温標準偏差値は季節や地域によりかなりの差があるが、夏はヨーロッパやアメリカでは1～2℃、冬はヨーロッパで2～3℃、アメリカでは2～4℃、シベリア地方では3～5℃ぐらいである。日本では変動が少なく、1～1.5℃ぐらいである。

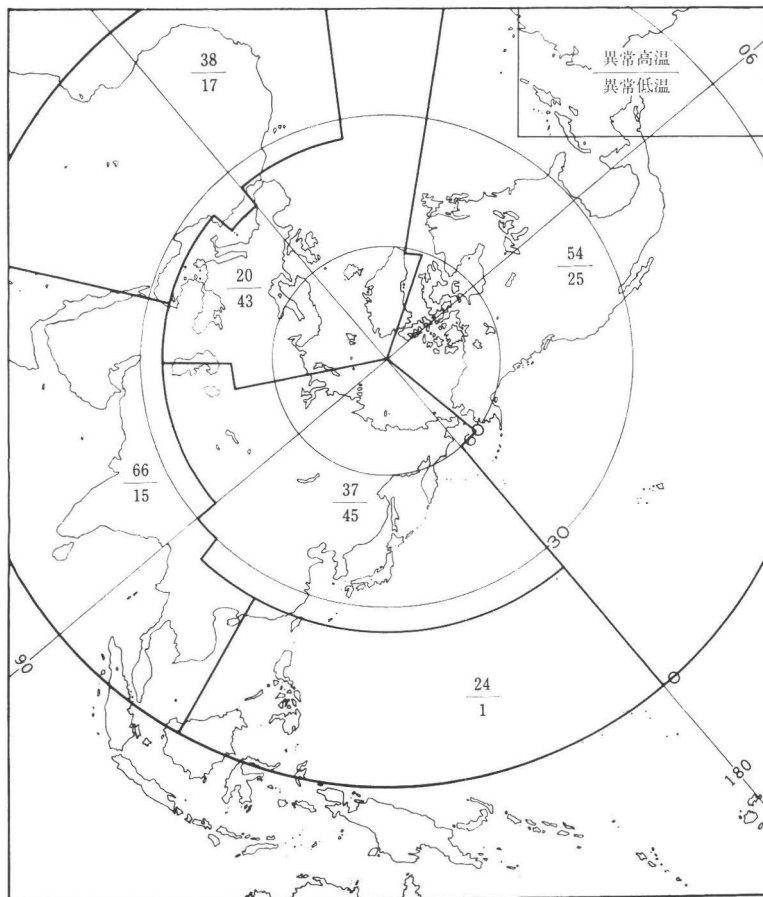
(2) 異常多(少)雨

月降水量の5分法による階級区分により、月降水量が基準としてとった30年間のどの値よりも大きい場合（降水階級6）を多雨、逆に小さい場合（降水階級0）を少雨とする。日本では1941～70年、他は1931～60年の30年間を基準年としている。

(3) 北半球域における異常高(低)温、多(少)雨域の分布について

異常値の発生回数を比較する場合、観測点が問題となる。ここでは、緯度、経度5度ごとに囲まれた地域の中で何地点異常値が観測されても1回として数えるようにし

第1図 異常高・低温発生数（1980年1月～12月）



で決める。

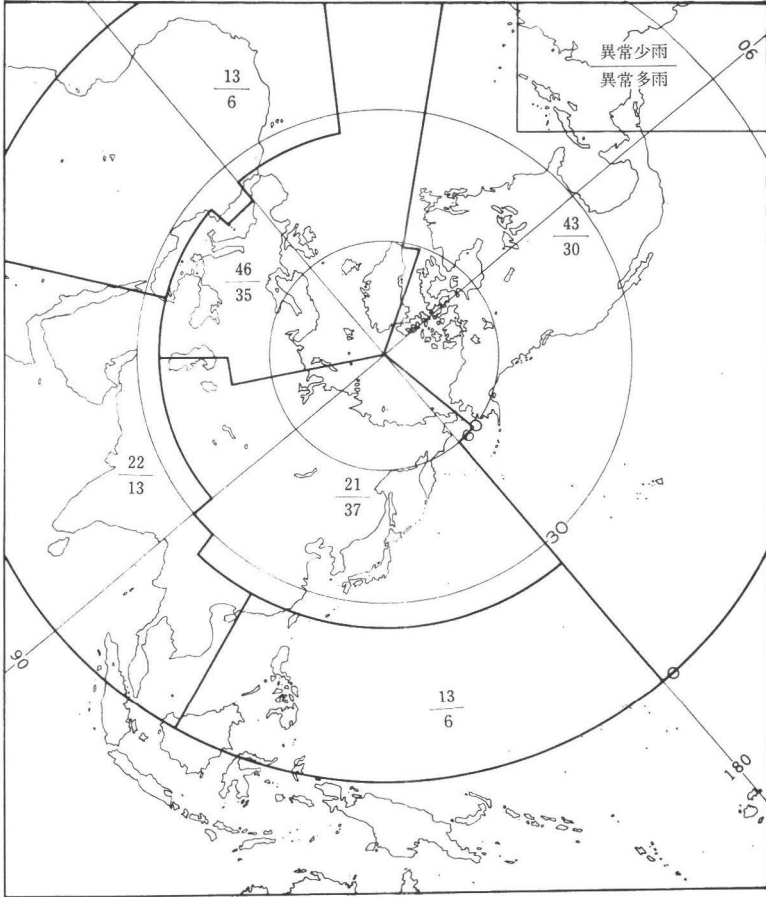
第1図は1980年1月～12月に観測された異常高温，異常低温の発生回数を比較した図である。

北半球域を大きくわけ，ヨーロッパ，アジア，ミクロネシア～フィリピン，東南アジア～インド，西アフリカおよびアメリカ大陸の6つの地域にわけて統計した。

北半球全体では異常高温239，異常低温146となり，異常高温が低温の2倍近くある。

しかし，図をみてわかるように地域により大きな差異がみられる。すなわち，ヨー

第2図 異常多・少雨発生数 (1980年1月～12月)



ロップからアジアにかけては異常低温を観測した地域が高温よりもはるかに多い。

一方、西アフリカや東南アジア、ミクロネシア方面の低緯度地方では異常高温のほうが低温の4倍近くもあり、これらのことは本年の大きな特徴であろう。

同じようにして第2図に多(少)雨を観測した地域について示す。

北半球全体では多雨127、少雨158で少雨地域が若干多い程度となっている。しかし、異常高(低)温分布と同じように、ヨーロッパからアジアにかけては多雨72、少雨67と多雨傾向を示し、低緯度地方では少雨が多くなっている。

以上の統計が示すように、北半球域をみても、かなり異なった異常天候が多く現わ

れており、この傾向は南半球域でも同じようである。

(4) 本年の世界の天候特性について

世界の天候について、その特徴を四季別に列記すると次のようになる。

(a) 冬（1～2月）

カナダ東部で暖冬

東欧は暖冬から寒冬へ

アメリカ東部で少雨

中国大陸～中央アジアで寒冬

アルゼンチンで低温つづく

(b) 春（3～5月）

ヨーロッパで寒春

東南アジアで異常高温つづく

西アフリカで猛暑

オーストラリアで少雨つづく

(c) 夏（6～8月）

アメリカで猛暑干ばつ

西欧で冷夏つづく

極東地域で異常低温

ブラジルで暖冬少雨

(d) 秋（9～11月）

アメリカ東部で異常高温つづく（9月）

西欧で暖秋（9月）

中央アジア～中国で冷秋

インド南部で異常高温、北部で低温

オーストラリアで少雨

(e) 初冬（12月）

北欧、南欧、カナダ東部、西日本で寒冬

東欧～中央アジア、アメリカ西部で暖冬

オーストラリアで高温つづく

(5) 地域別の天候特性について

四季別にのべた天候の特徴のうちおもなものについて月別・地域別にもう少しくわしく述べてみよう。

(a) 冬

1月はアメリカ東部を中心に降水量が少なく、1月の月降水量は20～70 mmで平年よりかなり少ない所が多かった。たとえば、ボストンでは19 mm (19%)の異常少雨を観測した。2月もこの状態が続き、アメリカ東部からミシシッピ川流域にかけて15～30 mm (20～40%)、南部のフロリダ半島のマイアミでも22 mm (47%)と平年の半分以下となった。また、レークプラシッドでは冬季オリンピックが始まったが、はじめは暖冬のため雪も少なく心配されたほどであった。

一方、西部地域では暖冬多雨となり、サンジェゴで17.5°C(+3.8°C)、114 mm (207%)の異常高温、サンフランシスコでは12.4°C(+1.9°C)、194 mm (220%)と平年の2倍以上を観測した。また、1 mm以上の降水日数も多く、サンフランシスコで12日間、その他アリゾナやカリフォルニア州では月の3分の1近くに達した。西部地域では日本のプロ野球球団がキャンプ中で大きな影響があったといわれた。

アルゼンチンではパラナ川流域から西部地域で、1月の平均気温が平年より1～3°C低く、降水量も少なく冷夏となった。たとえば、パラナでは月平均気温や月降水量は、24.0°C(-1.2°C)、10 mm (7%)、パラナ川中流域のレンステンシア (27° S, 59° W) では23.6°C(-3.5°C)、92 mm (69%)の異常低温を観測した。2月はアルゼンチンとブラジル南東部で雨が多かった。

アルゼンチン北部からボリビア、パラグアイにかけて月平均気温は平年より2～3°C低くなって一部地域では異常低温が続き、不順な夏の天候であった。

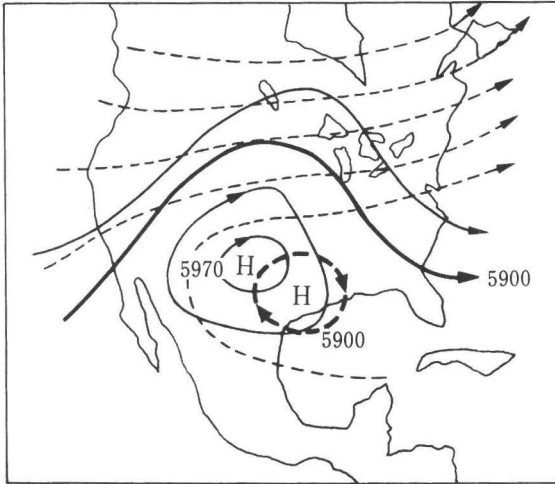
(b) 春

ヨーロッパでは、3月平均気温が平年より2～4°C低く、春の訪れの遅い地域が目だった。たとえば、3月のパリは6.0°C(-1.2°C)、89 mm (278%)、降水日数は16日間もあり平年より9日多くなった。

4月には大西洋高気圧の一部が東に張りだし、このためイギリス西方海上で月平均気圧は1,026 mb (+12 mb)に発達した。この高気圧の圏内に入ったイギリスやフランスでは全国的に、イタリアでは北部中心に月降水量が10～20 mmとなり、著しい干天となった。一方、東欧では気圧の谷の中にあることが多く、3月に引き続き寒春で雨も多く、ドイツ、ハンガリー、オーストリアでは異常低温が現われるなど、不順な天候となった。ウィーンで7.3°C(-3.0°C)、125 mm (278%)、ウクライナのオデッサでは7.6°C(-0.8°C)、75 mm (278%)と平年の2倍以上の雨が降った。この傾向は5月も続き、高気圧におおわれたイギリスでは少雨が続いた。

台湾から華南およびインドシナ半島では3、4月に高温少雨が続いた。外電によると、ベトナム北部のソンコイ川の水位が下がり、ハノイ周辺では水位が1963年と同じで、20年来最大の干ばつに直面したという。ソンコイ川上流にある中国雲南省の蒙自(モンツー)では3月の降水量はわずか3 mm (11%)であった。

第3図 高温干ばつになりはじめたころの5,500m上空の大気の流れ (1980年6月26日21時)



(注) 点線は平年の流れ。

5月のサンパウロでは 19.4°C ($+2.1^{\circ}\text{C}$), 5 mm (10%) の異常高温少雨を観測した。

(c) 夏

アメリカ中西部や南部地方では6～8月に大きな高気圧におおわれ、暑さのため多くの死者や干ばつのため農作物に大きな被害がでた。外電によると6月下旬にテキサス州では1週間連続 38°C を越し、ダラスでは26日 43.8°C を記録、ウイチタでは 47°C の熱波がおそったという。7～8月も猛暑干天が続き、たとえば、オクラホマシティでは7月に 31.3°C ($+4.1^{\circ}\text{C}$), 11 mm (18%), 8月に 31.1°C ($+3.7^{\circ}\text{C}$), 15 mm (23%) の異常高温少雨が続いた。

その他、アトランタ、ニューオーリンズなどでも異常高温が現われた。異常高温が現われ、問題となりはじめた6月26日の5,500m上空の大気の流れ図を第3図に示した。図のように平年では5,900mで表わされる上空の高気圧は6月26日は非常に発達していることがわかる。猛暑干天はこのような大気の流れが、8月いっぱい続いたことが大きな原因であろう。

地上では、平年にはフロリダ半島までのびている大西洋高気圧の張りだしの一部1,016 mb の等圧線は西にのび、テキサス州に達し、ミシシッピ川下流域を中心に1,018 mb の大きな高気圧が形成され持続したことである。

ヨーロッパではスカンジナビア半島やイベリア半島の一部をのぞき、7～8月の平

西アフリカでは3～5月に異常高温が現われた。すなわち、ニジェール川流域で4月を中心に月平均気温が平年より 2°C 前後高くなり、異常高温干天の範囲が大きかった。

オーストラリアでは3月に全国的に月降水量が5 mm 前後で著しい干天となった。4～5月も南東部を中心に高温少雨が続いた。また、ブラジルからアルゼンチン北部にかけては3～5月に異常高温が目だった。たとえば

均気温は平年より2～4℃低く、雨も多い不順な天候が続いた。7、8月の平均気温や月降水量は7月にパリで16.4℃(−2.6℃)、105 mm(191%)、ロンドンでは15.2℃(−2.4℃)、73 mm(130%)、8月にモスクワで14.7℃(−2.4℃)、140 mm(189%)を観測した。

極東域では7、8月と同じような気温偏差分布となった。この2カ月とも日本付近から中国大陸にかけて低温が続き、一方シベリアでは高温が続いた。とくに、8月の低温が著しく、8月平均気温は平年より2～4℃低く、各地で異常低温が現われた。中国大陸でも低温が続き、揚子江流域で異常低温域が大きかった。降水量も揚子江流域で7月に200～300 mm(100～150%)、8月に200～400 mm(200～300%)と多くなった。しかし、華北地区では7月には30～50 mm、8月には50～100 mmで平年の半分以下の所が多くなり、一部では水不足が伝えられた。

インド半島ではガンジス川流域を中心にして4～5月続いた高温は一転して低温多雨となった。アラハバードでは6月平均気温は31.5℃(−2.8℃)、163 mm(163%)の異常低温で、低温域はインドシナ半島まで及び、タイやビルマでも低温に経過した。7～8月はインドシナ半島やインド半島南部からセイロン島方面では高温となり、一部地域では異常高温が現われた。

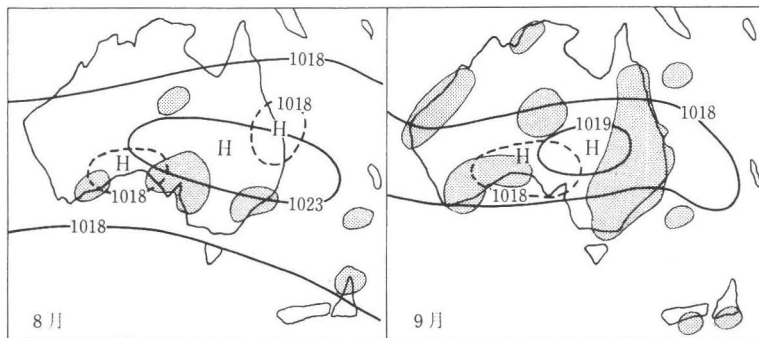
ブラジルでは7、8月にブラジル高原を中心として暖冬となった。たとえば、首都ブラジリアの近くのゴイアニアの月平均気温は7月22.6℃(+4.2℃)、8月24.4℃(+3.8℃)となり、異常高温が続いた。また、ブラジル東部や中部地域では無降水の所が多かった。一方、オーストラリアでは6月と8月に高温少雨域が目だった。

(d) 秋

アメリカ南部から東部にかけては8月に続き高気圧におおわれ、異常高温で雨も少なかった。ワシントンでは8月に28.2℃(+3.5℃)、28 mm(23%)、9月には24.9℃(+4.0℃)、48 mm(49%)となり、異常高温が続いた。しかし、10月に入ると平年並みの気温にもどり、中・下旬に強い寒波が入り、10月平均では五大湖付近を中心に平均気温が平年より2～4℃も低くなり、一部で異常低温となった。外電によると、アイオワ、ネブラスカ両州では28日に10月としては吹雪を伴った記録的な大雪が降り、交通機関に大きな影響があったと伝えられた。

西欧では9月にイベリア半島を中心に異常高温、東欧では黒海付近を中心に異常低温となるなど、ヨーロッパの9月の気温分布は地域差が大きかった。とくに、西欧では大西洋高気圧の東の張りだしが強かった。たとえば、1,020 mbの東の張りだしは、平年ではイベリア半島の西方海上であるが、昨年9月は東経20度のヨーロッパ中部までのびた。ベルリンの月平均気圧は1,019.1 mb(+2.6 mb)の高圧となった。また、北緯50度、東経20度の平均気圧は1,020.1 mbとなった。昨年のように大西洋高気圧の張りだしで1,020 mb以上となった年は1950年代は1回、60年代は一度もなく、70

第4図 1980年8月～9月の月平均気圧分布図と少雨地域



(注) 点線は平年の高気圧の位置を示す。

年代は2回あるのみで30年間に3回にすぎない。このような高気圧におおわれた西欧では月降水量が30～50 mmで平年の半分程度の所が多かった。

オーストラリアでは9月に高温少雨の所が多く、とくに東海岸寄りの地域ではほとんど雨が降らなかった。南東部のミルドラでは15.9℃(+2.3℃)、3 mm (11%)となり、異常高温が現われた。外電によると10月も雨が少なく、ビクトリア州南東部では10月に入ると山火事が多くなり、上旬までに8万 ha に近い山林や牧草地帯が焼失、また、雨不足のため小麦畑など農作物一般に大きな被害があったことを伝えている。第4図に8～9月のオーストラリア付近の月平均地上気圧分布図を示した。点線は平年の高気圧の位置と強さを示してあるが、本年の8～9月はいかに高気圧の勢力が強かったかがわかる。この高気圧に広くおおわれ、オーストラリアでは少雨が続いたことが理解されよう。しかし、10月には気圧の谷の影響を受けるようになり、サウスオーストラリア州南部では月降水量も50～90 mmになりいくぶんめぐみの雨となったようである。

日本付近から中国大陸では9月の気温は平年より1～2℃低くなった所が多く、揚子江や黄河流域では8月につづき9～10月と低温が続いている。また、7～8月に雨の多かった揚子江流域では9月には50～100 mm となり、平年の半分ぐらいと少なくなった。また、少雨傾向の続いている華北方面では一部地域では多くなったが、全般的には9～10月と50 mm前後の所が多く、平年よりかなり少ない状態が続いている。

インド南部からセイロン島にかけては9月も異常高温となった所が多く、反対にインド北部のガンジス川上流域では異常低温が現われ、インド半島では地域差の大きい気温分布となった。しかし、10月にはインド全般に高温に転じるなど、インドの秋は変動の大きい天候となった。また、タイ南部では雨が多く、バンコクで9月降水量は

352 mm (115%) を観測し、外電では10月に入ってもスコールによる豪雨が続けていると伝えている。

11月もオーストラリアでは全般に平均気温が2～3℃高く、降水量は引き続き少なかった。前に述べたミルドラでは21.7℃(+2.5℃)、18 mm(26%) の異常高温を観測した。

一方、ニュージーランドでは1～2℃の低温となり、南島のクラストチャーチでは11月の平均気温は11.9℃(-1.9℃)、65 mm (155%) となり、異常低温で雨が多かった。

(e) 初冬

12月は東欧から中央アジアにかけて大きな気圧の尾根におおわれた。このため、同地方では月平均気温が平年より2～6℃高くなり、暖かな初冬の天候となった。外電によると、モスクワでは16日に日中の気温は4℃で1879年12月16日に観測された3.7℃の高温記録を101年ぶりに更新したという。モスクワの12月下旬の平均気温は-1℃で平年より8℃高く、オムスクでも下旬前半の平均気温は-6℃(+12℃)の暖かさとなった。

極東域では北暖西冷の気温分布となり、東シベリアから北日本にかけての12月平均気温は平年より2～8℃高く、東シベリアのオホーツクでは-12.1℃(+8.0℃)の異常高温が現われた。一方、西日本から韓国、華北から台湾にかけての地域では1～2℃低くなり、冬の訪れが早かった。韓国の釜山では2.2℃(-2.8℃)の異常低温となった。

北アメリカではカナダからアメリカ東部にかけては12月平均気温が平年より2～7℃低く、五大湖北方域では異常低温、反対にアメリカ西部では2～6℃高くなり、異常高温となった。外電によると、12月24日夜から急速に下がりはじめた気温は、25日朝、ニューヨーク州のオールドフォージュで-38℃、デトロイト、シカゴでは-21℃を観測した。シカゴやニューヨークで、クリスマスの気温としては1872年に観測が始まって以来の最低記録であると伝えられた。12月平均気温はニューヨークで-0.7℃(-3.1℃)の低温となった。

オーストラリアでは11月に引き続き、高気圧におおわれ、南部中心に12月平均気温が平年より2℃前後高くなり、所々で異常高温が現われた。首都のキャンベラでも20.1℃(+1.7℃)の異常高温を観測した。

ブラジル南部からアルゼンチン北部では降水量の多い地域が目だった。たとえば、月降水量はブラジルのクリチバで315 mm(214%)、ポルトアレグレで217 mm (247%)、1 mm以上の降水日数はそれぞれ18日および15日で、月の半分以上に達した。

2. 日本の異常天候

(1) 8月の冷夏

1980年は夏（8月）を中心に全国的に冷夏となった。すなわち、明治35年(1902年)、同38年(1905年)、大正2年(1913年)の三大冷害年に匹敵する異常な低温、日照不足、多雨の天候となった。一方、沖縄地方では記録的な高温と干ばつに見舞われた。

異常低温域が北海道から九州までの広い地域に及んだことは最近には例のないことである。第5図に1902、1905、1913年および1980年の7～8月の半月平均気温偏差の経過を示した。東北地方の宮古と東京、福岡の気温経過であるが、ここにあげた4年間とも非常によく似た変化を示していることがわかる。

異常低温は8月上旬がもっとも強く現われているが、第6図に日本全体の8月平均気温偏差分布図、8月降水量比率図および8月の日照時間平年比の図を示した。地域毎にどのような値を示したかがわかる。

低温域のもっとも著しい地域は東北地方から関東地方にかけての太平洋側の地域であり、平年より3～4℃前後低くなり、標準偏差値の3～4倍にあたる異常低温となった。また、降水量も西日本や北陸、東北地方の一部では平年の2倍以上の多雨を観測した。図には示していないが、7月の平均気温や降水量も8月とよく似た分布となったが、その程度は若干弱く、7月平均気温は平年より1～2℃低かった。

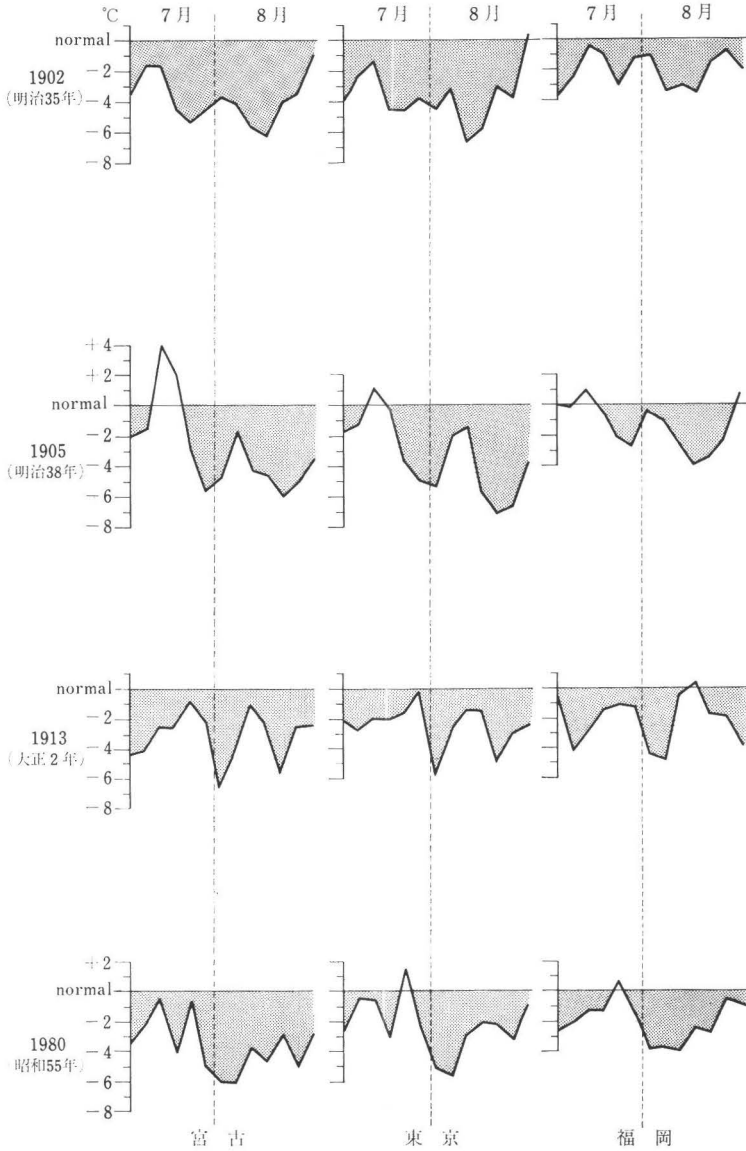
次にこのような気温分布が、前にあげた冷害年などどのように違うのか、その程度について第1表に示そう。

第1表 1980年地域別7～8月平均気温偏差（低温の順、平年値1931～1960年）

北海道		東北地方		北陸地方		西日本	
年	偏差℃	年	偏差℃	年	偏差℃	年	偏差℃
1913	-3.2	1902	-3.2	1902	-2.8	1902	-1.9
1902	-3.1	1913	-2.6	1913	-2.6	1905	-1.4
1941	-2.8	1980	-2.6	1905	-1.9	1913	-1.4
1956	-2.2	1905	-2.4	1980	-1.8	1980	-1.4
1954	-2.2	1941	-2.0	1903	-1.8	1908	-1.3
1980	-2.1	1976	-1.8			1901	-1.3
1945	-1.8						
平年値	19.4	平年値	22.8	平年値	25.3	平年値	26.8

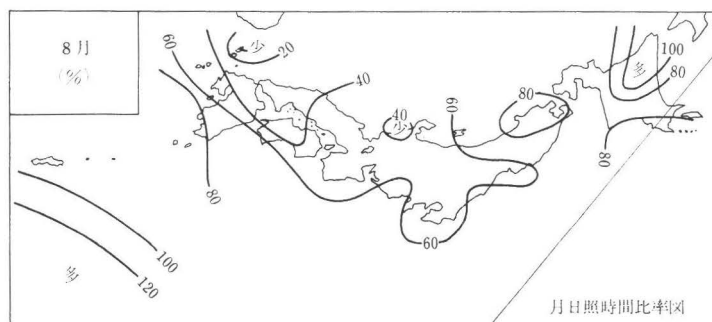
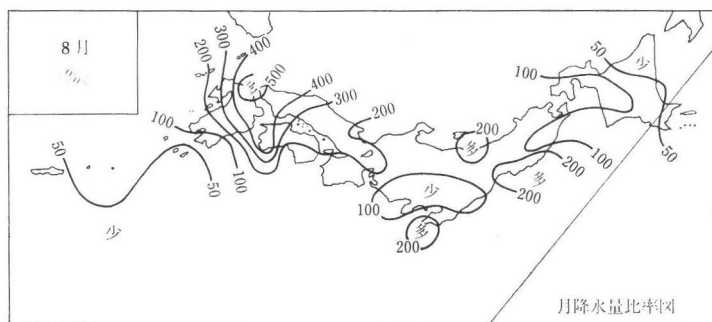
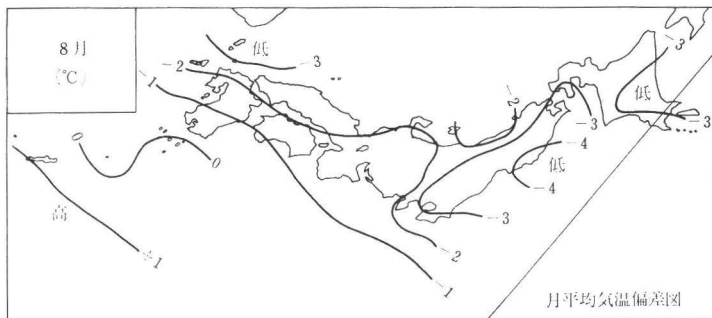
(注) 北海道(7地点平均気温): 旭川, 札幌, 寿都, 函館, 帯広, 根室, 網走。
 東北地方(6地点): 青森, 秋田, 宮古, 山形, 石巻, 福島。
 北陸地方(2地点): 新潟, 金沢。
 西日本(3地点): 大阪, 広島, 熊本。

第5図 半月平均気温偏差図



(注) normal: 1941-1970.

第6図 気温、降水量、日照時間分布図



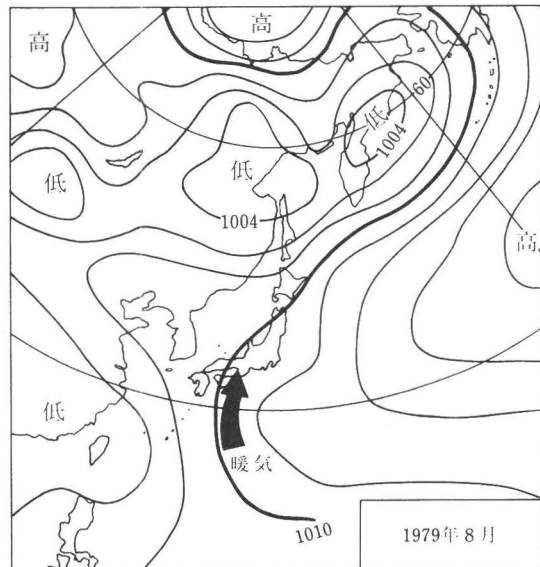
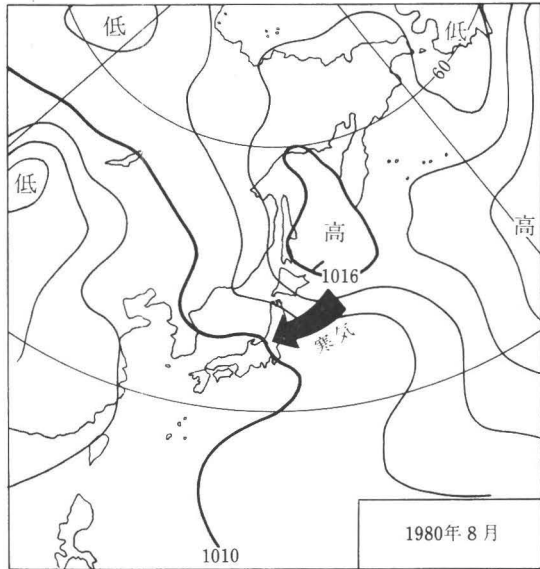
1980年7～8月の平均気温は1885年以後の資料では第1表ようになっており、いずれも地域平均気温は第5位以内の記録的な低温である。とくに、東北地方の第2位(タイ)にあたる低温記録が注目される。

(2) オホーツク海高気圧の動向

前述したような異常低温となった原因は、オホーツク海高気圧が8月に長期間停滞し、日本付近で著しい低指数型循環が続いたためである。第7図に1980年8月と1979年8月の地上気圧分布図を示した。この両者を比較すると1980年はオホーツク海高気圧が著しく強いことがわかる。一見して、梅雨型気圧配置が強い6、7月の気圧分布に似ており、冷涼な寒気の南下が顕著であったことがわかる。参考までに両年の8月平均気温偏差を示す(第2表参照)。

オホーツク海高気圧が7～8月と強く、冷涼な天候が続いたが、夏(6～8月)のオホーツク海高気圧の中心付近の50°N, 150°Eにおける月平均気圧の強さを

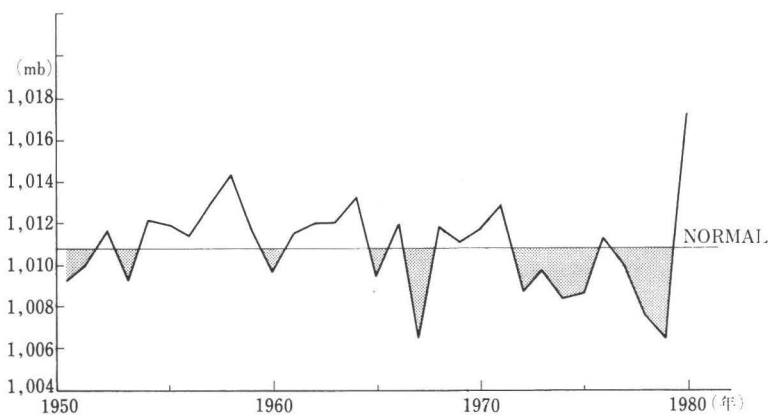
第7図 月平均気圧分布図



第2表 1980年と1979年の8月平均気温偏差

	1980年	1979年
北 日 本	-3.2°C	0.5°C
中 部 日 本	-2.1	0.2
西 日 本	-1.7	0.5
沖 縄	1.2	-0.1

第8図 50°N, 150°E 8月地上月平均気圧の経過 (オホーツク海高気圧の強さ)



1950年以後の30年間についてみると次のようになる。

6月：1,010.4 mb で平年より0.5 mb 低い。

7月：1,012.7 mb で平年より2.4 mb 高い。この値は、1954年1,015.4 mb, 1953年1,013.2 mb, 1974年1,013.1 mb, 1951年1,012.7 mb について第4位タイにあたる高い記録となった。

8月：1,017.3 mb で平年より6.4 mb 高く、第1位の高い記録となった。

第8図に8月の50°N, 150°Eの平均気圧の変化図を示した。1950年代は上昇傾向、1970年代は下降傾向が著しかった。

次にオホーツク海高気圧の出現日についてのべる。

オホーツク海高気圧が8月に10日以上出現した年は第3表のようになる。

オホーツク海高気圧は明治から大正年代に多く出現しており、1980年は1902年以来第1位タイの出現記録となった。

第3表 オホーツク海高気圧の出現日数

年	出現日	年	出現日	年	出現日
1901	11	1906	20	1969	16
1902	21	1910	12	1971	10
1903	16	1912	10	1976	10
1904	18	1915	11	<u>1980</u>	21
1905	20	1941	11		

第4表 南西諸島の月降水量（1980年4～8月）

（単位：mm）

地名	4	5	6	7	8
名瀬	282 (138%)	448 (122%)	308 (68%)	35 (16%)	306 (94%)
那覇	525 (370%)	97 (40%)	20 (6%)	102 (59%)	90 (36%)
石垣島	452 (321%)	154 (68%)	25 (10%)	220 (139%)	191 (100%)
宮古島	558 (336%)	234 (100%)	39 (13%)	133 (64%)	95 (42%)
南大東島	201 (176%)	76 (34%)	29 (12%)	195 (150%)	53 (30%)

(3) 沖縄地方の少雨

南西諸島では4月に低気圧や前線の影響で曇りや雨の降る日が多く、とくに、那覇や宮古島では4月降水量が観測開始以来第1位の多雨記録となった。その後は沖縄本島や石垣島では雨が少なかった。沖縄の梅雨明けは6月15日（平年より7日早い）以後は太平洋高気圧におおわれ、全般に少雨傾向が続いた。4月から8月までの南西諸島の月降水量を第4表に示す。

とくに、6月の少雨が目立ち、那覇で第1位、宮古島や石垣島で第3位の少雨記録となった。

月の日照時間も多く、那覇で312.5時間、南大東島で293.2時間とともに第1位の多照記録を観測した。これは、夏の太平洋高気圧の西の張りだしが強く、沖縄方面からフィリピン方面を広くおおったためである。沖縄方面では6月がもっとも高圧となった。たとえば、那覇の6月平均気圧は1,013 mbで平年より4.4 mb高くなった。この値は明治24年（1891年）以後では第1位の高圧記録となった（1945年をのぞく）。

(4) 1980年1月～10月までの異常天候

第5表 1980年異常天候一覽

(単位：気温=℃，降水量=mm)

月	異常天候と地点
1月	1位の記録なし
2月	少雨：松本5，米子36，浜田32
3月	多雨：種子島329 少雨：青森55
4月	多雨：那覇525，宮古島558
5月	多雨：鹿児島559
6月	少雨：那覇20，南大東島29 高温：留萌16.1，函館17.1
7月	低温：大阪(25.8) 多雨：仙台445，福岡886，長崎864 少雨：網走11
8月	低温：網走15.1，宮古18.0，広島24.3，浜田23.3，福岡24.5，御前崎24.5 高温：那覇28.8，南大東島29.0 多雨：福岡847，浜田499，大分731，足摺973
9月	少雨：米子29
10月	1位の記録なし

(注) ()はタイ記録を示す。

各月の気候電報より、観測開始以来第1位に入る高温、低温、多雨、少雨を観測した地点の一覧表を示す(第5表参照)。

(5) 台風について

10月までの台風発生数は22個(平年24個)で、台風活動が活発な6月から9月までは13個(6～18号)発生した。このうち、12号は南西諸島南部を西北西に進み、台湾を経て中国大陸に上陸した。13号は九州南部に上陸、その他はフィリピンから南シナ海および日本の東海上を北東進した台風が多かった。

上陸または影響した台風の概要を述べる。

台風7号：直接台風としての影響はなかったが、8月12日に中国大陸に上陸した台風7号は、上陸後温帯低気圧となり北東進して日本海南部に進んだ。この低気圧の通過と、秋田付近にあった低気圧の影響で九州北部を中心とする西日本、東北

地方、北海道南部で大雨が降った。8月28～31日の総雨量は、阿蘇黒川で666 mm、登別で493 mm、九州北部を中心に死者・行方不明計25名、鉄道不通、浸水などでかなりの被害がでた。

台風12号：8月27日に石垣島の南西海上を通り、台湾北部を経て中国大陸に上陸した。与那国島では最大風速47.3 m/s、最大瞬間風速66.5 m/sを記録、家屋6戸全壊などの被害がでた。

台風13号：沖縄の東方海上を北上し、9月11日に鹿児島県大隅半島に上陸、九州東部を北上し、日本海に進んだ。このため、近畿から九州の各県に暴風雨・洪水・波浪・高潮警報がでた。種子島で最大瞬間風速 SW. 41.0 m/s、福岡・山口・高知・徳島・兵庫の各県では死者・行方不明計11名がでた。国鉄は新幹線はじめ九州・四国の各線で一部運休し、空の便も乱れた。10～11日の雨量は、宮崎県神門で651 mm、矢櫃岳で557 mm、えびので525 mm、徳島県旭岳で568 mmに達した。

(気象庁、浜田測候所長)